

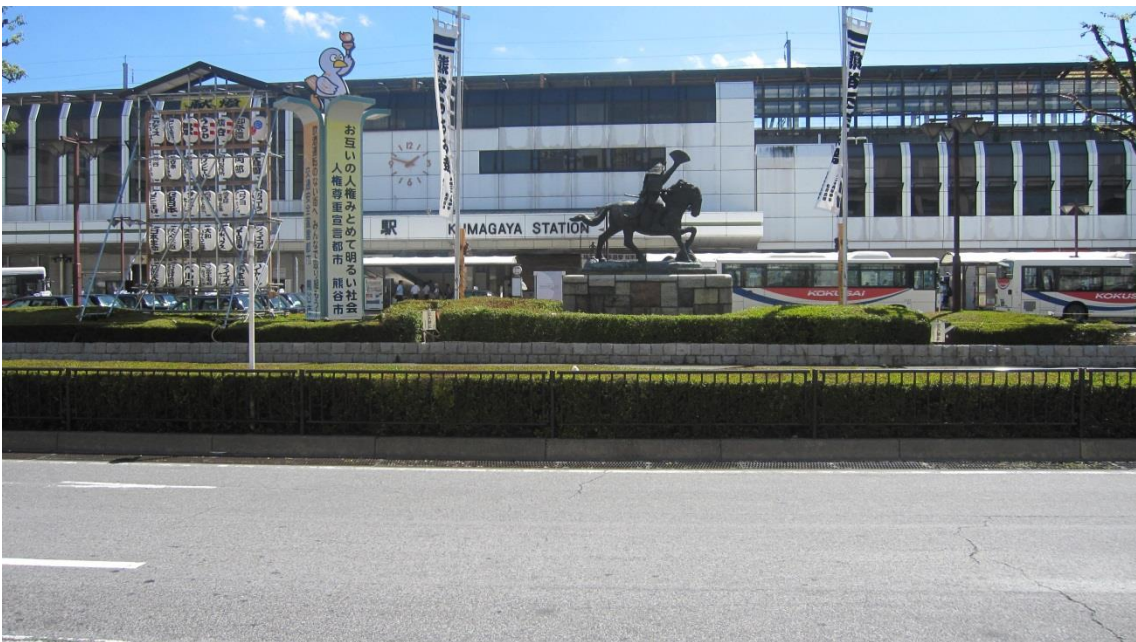
2016年11月29日

工学研究教育と源平合戦二題

(1) 埼玉県熊谷市の企業を訪問。初めて熊谷の地に立つ。

JR高崎線 熊谷駅前に騎馬武者像。

ここは平家物語での熊谷直実ゆかりの地であることに気付く。



源義経の軍勢の武将として 一の谷の合戦に参戦 (平家物語)

この戦いで良き敵を探し求めていた直実は、波際を逃げようとしていた平家の公達らしき騎乗の若武者を呼び止めて一騎打ちを挑む。直実がむんずと取っ組んで若武者を馬から落とし、首を取ろうとすると、ちょうど我が子・直家ぐらいの年齢だった。直家はこの戦いの直前に矢に射抜かれ深手を負っていたので、直実はその仇討ちとばかりにこの若武者に挑んだのである。

直実が「私は熊谷出身の次郎直実だ、あなたさまはどなたか」と訊くと、敦盛は「名乗ることはない、首実検すれば分かることだ」と健気に答えた。これを聞いて直実は一瞬この若武者を逃がそうとしたが、背後に味方の手勢が迫る中、「同じことなら直実の手におかけ申して、後世のためのお供養をいたしましょう」といって、泣く泣くその首を切った。

その後、首実検をするとこの公達は清盛の甥・平敦盛と判明、年齢十七だった。討ち死にの折に帯びていた笛「小枝」は、笛の名手として知られた敦盛の祖父・忠盛が鳥羽上皇から賜ったものだという。これ以後直実には深く思うところがあり、仏門に帰依する思いはいっそう強くなったという。 (Wikipedia)



平敦盛



熊谷直実



義経軍の鴨越の逆落とし

織田信長の好んだ歌

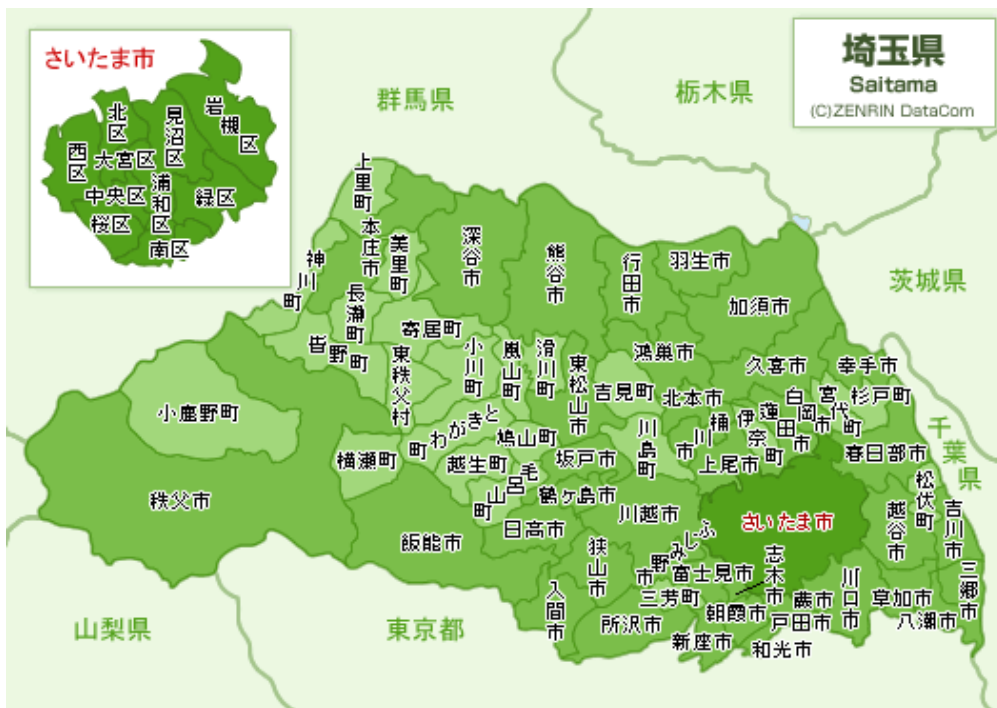
『人間五十年，下天のちをくらぶれば，夢幻の如くなり。

一度生を享け滅せぬもののあるべきか』

はこれを題材にした幸若舞の『敦盛』の一節。

信長は桶狭間の戦いに際し 『敦盛』を舞って出陣した。

信長の歴史小説，時代劇によく出てくるシーンであることを思い出す。



(2) 筆者は「群馬大学アナログ集積回路研究会」を主宰している。

<http://analog.el.gunma-u.ac.jp/>

10年以上継続し 280回を超える講演会やパネル討論を行ってきた。

これは自分自身が学び 少しでも向上したい気持ちが原動力になっている。

ずいぶん前になるが、そこで聴いた話しが大きく自分を変えた。

技術者として働き その会社の社長になった方が、どうして社長になれたかの理由として次の主旨の説明をされていた。

「自分は会社の創業者一族の出身ではない、サラリーマン社長である。

会社は地方にあるがそこから毎週2-3回東京に出張がある。

その行き帰りの電車の中で様々な分野の本を読んだ。それが非常に役立った。」

また、高倉健さんがインタビューで「本を読み、人間として役者として成長した」と話しておられたのが印象に残っている。

「本を読む」ことの重要性に気が付き 多くの本を読むようになった。

たとえば通勤、出張時の電車、飛行機、その待ち時間等を利用する。

また東京に出張の際に空いている時間がある場合は大きな書店に立ち寄り、

何冊も注文する。たくさんのことを自分が知らないということに気が付く。

その中で下記の2冊の本に出会った。

[1] G. ポリア (著), 柿内 賢信 (訳) 「いかにして問題をとくか」

(How to Solve it. By G. Polya) 丸善 (1975)

[2] 芳沢光雄 (著) 「いかにして問題をとくか・実践活用編」 丸善 (2014)

[1] は通称「いか問」と呼ばれている著名な古典らしいことがわかったが、難解そうである。[2] は分かりやすく解説している。ぜひこの本を丁寧に読みたいと思い、学部2年の少人数ゼミで 学生7-8人とともに時間をかけてこれを題材にした輪講をした。

最初にわかりやすい解説である[2] を読み、その後[1] を読み進める。

[1] は内容が難解であるとともに翻訳が格調高い。

その翻訳文の中に「逆櫓」という言葉が自然に使われており、

翻訳者の柿内賢信先生の教養に学生とともに感心する。

逆櫓 さかろ

船を後ろへも自由に漕ぎ進められるように、船の前部に取り付けられた櫓

義経と景時の逆櫓論争（平家物語）

源頼朝から平家追討の命を受けた源義経が摂津国の港・渡邊津に軍を集めた。

『平家物語』によれば、源義経と戦奉行の梶原景時がこの地の大きな松の下で軍議の評定を行った。景時は、「船のへさきにも櫓を付けて、どの方向へもたやすく転回出来るようにしたい」と進言した。それに対して義経は、

「はじめから逃げることを考えては縁起が悪い」と景時の意見を退けた。

暴風雨のために景時は出航を見合わせようとするが、義経は僅か5艘150騎で暴風雨をついて出航する。義経の兵団は通常3日の航路を6時間ほどで阿波国勝浦に到着し、平家の軍がいた屋島を急襲した。（Wikipedia）



が、これが一因となり、義経の悲劇へとつながっていく。

義経の戦い方の印象

- 迅速
- リスクを取る
- 戦いは、正を以て合い、奇を以て勝つ

最期の「戦いは..」を書いていて、次の言葉を思い出す。

「常識や本筋の分からない人はプロにはなれない。

本筋しか指せない人は一流にはなれない。」 プロ棋士（将棋）谷川浩司九段

研究開発でも かくありたいと思う。

柿内賢信（訳） G. ポリア（著） 「いかにして問題をとくか」 丸善出版（1973年）

P. 99

「失敗したら別のことをやってみるべきである。君子豹変す。
一つの手がだめなとき、あらかじめ他の手を用意しておくべきであって、
これはいわゆる**逆櫓**の精神である。もたらんいろいろつつきくさして時間を損
することはありうる。」